

2012/04/03

東京大学大学院人文社会系研究科

次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣

帰国報告

派遣時・東京大学文学部言語文化学科フランス語フランス文学専修4年
現・同大学大学院人文社会系研究科フランス語フランス文学専攻修士1年
秋元陽平（個人派遣）

研究課題名・ロラン・バルトを中心とするフランス論壇とブレヒト演劇の関係

派遣先ならびに目的・ドイツ、ベルリン

ベルリン自由大学図書館ならびにフンボルト大学図書館
ベルリナー・アンサンブルをはじめとするドイツ舞台芸術と
フランス批評の関係性に関する調査

派遣期間・2012年2月20日～2012年3月18日（29日間）

主な研究成果

（1）当初の研究計画の概要

筆者の直接の研究対象国であるフランスの隣国の言語を学ぶことの出来るこのような貴重な機会を生かし、第三外国語として基礎を修めたに留まるドイツ語を、卒業論文提出後に改めて一通り習熟し、大学院への礎となすことを希望すると同時に、直接の研究対象であるバルトに大きな影響を与えたブレヒトが遺した劇団、ベルリナー・アンサンブルの2月の公演（ブレヒトを上演する）に直に立ち会って、1950年代に書かれた劇評を相対化しながら改めて演劇批評について考察を深める。

（2）実際に達成された成果

ドイツ語の習熟に関しては、学習を初めて1ヶ月足らずで渡航したため当初は難儀したものの、滞在中に現地の教材を用いて学習した結果、辞書を用いながら、緩慢にはあ

るが戯曲の台本を読みこなすことが出来るようになり、日本語或いはフランス語翻訳に頼らず原文を用いた研究へと一歩近づくことが出来たと自負している。また、ベルリナー・アンサンブルの公演については、卒業論文でも触れた「肝っ玉おっ母とその子どもたち」「コーカサスの白墨の輪」に立ち会うことが出来たのみならず、ブレヒトが21歳の時に著した習作的戯曲である「小市民の結婚式」を観劇する機会に恵まれた。卒業論文では主に1954年のブレヒト自身の演出によるパリ公演に立ち会った批評家バルトの分析を扱ったが、現在のベルリナー・アンサンブルの演出はバルトの劇評に書かれた分析内容との差異、すなわちバルトがまさにブレヒトの魅力と賞賛していた「距離化」の技法の欠落には強い衝撃を受けた。これは現在のドラマトゥルクの意向も大きく関係していると思われるが、ベルリナー・アンサンブルのみならず他の多くの劇団には、ブレヒトの影響のもとでキャリアを積んできたドラマトゥルクが現在活動しており、必ずしもベルリナー・アンサンブルがブレヒトの指導に拘泥しているわけではないことにも気付かされた。バルトが羨望を込めて指摘した50年代から現在に至るまで、ベルリンは手厚い文化助成金のもとで複数の劇団、オペラハウスや舞踊団を擁立しており、私はほとんど毎晩何かしらの上演に立ち会うことが出来た。その多くは古典の再演を中心に活動しているものの、ベルリナー・アンサンブル含む各劇団は差異化を図るため演出にめまぐるしい変化を付けており、ブレヒト演劇もその例外ではなかった。同時にそれは、時代を孕む演劇というメディアの性質、そしてフランスの論壇におけるブルジョワ批判が加熱した1950年代に書かれた劇評がもつ必然的なバイアスを改めて体感させるものであった。こうした発見は、実際にベルリンへの滞在を通して多くの舞台に足を運ぶことによってのみ説得的にもたらされたと感じている。

また、以下は直接の研究領域を離れた収穫であるが、下宿先を提供して下さったアーティストの中原一樹氏と舞踊家の畦地亜耶加氏には、まさに現在ベルリンを拠点に活躍する芸術家によるパフォーマンスについて多くの示唆を頂いた。中原氏からは市政により閉鎖が決定した美術館で行われた若手芸術家たちの抵抗展「Zwischenspiel」を紹介して頂いた。またご自身では版画や墨を用いた平面作品の創作に携わっておられ、ルーツである書道についてもご教示頂いた。また、畦地氏は現在、建築や音楽家とコラボレーションで世界的に注目を浴びるコレオグラファー、サシャ・ヴァルツのカンパニーで舞踊家として活動されており、彼女の厚意で私は、新作「Gefaltet」のリハーサルに立ち会うことが出来た。この公演と、ジャズピアニストの高瀬アキと舞踊家の川口ゆいによる「Chaconne」はいずれも演奏家の身体とダンスのきびしい相互干渉を通して、音楽とダンスの関係について問い直す点で共通しているが、両者の演奏家の身体の扱いの差異は示唆的であり、ヨーロッパにおける楽器演奏者の身体という問題をわたしに提起した。また此処には書き尽くすことが出来ないが、フンボルト大学やベルリンの美術館に留学・調査滞在する歴史学や文学、美術史の研究者たちと知己を得、議論を交わすことが出来た。

(3) 今後の研究展望

卒業論文ではこれまで顧みられることの無かったバルトの演劇批評家としてのキャリアの中に互いに衝突する理想が併存しており、これらの対立こそが批評とテキストの関係、書く自分と書かれる自分の関係を根源から問い直した自伝作品の執筆を準備していたことを論証した。つまり、芸術批評を経年的に観察することを通して批評家の視点の変化を明らかにし、批評家自身に内在する問題を抽出するというのが卒論を通じてもっていた私の関心であるが、バルトは演劇の他にも芸術について多くのテキストを遺している。それは例えば書道や(「記号の帝国」)、演奏家、声楽家の身体(「声の肌理」)、或いはサイ・トゥウォンブリの絵画(「サイ・トゥウォンブリまたは質より量」といった、私がまさにベルリンで、偶然的にであれ出会って考えはじめた問題について言及したものであった。従って私は今回立ち会った多くのパフォーマンスから得た示唆を、一方ではとりわけ印象的だった公演を劇評の形で執筆し、他方では研究においては上記のバルトによる批評テキストについて、演劇、音楽、絵画といった異なるメディア間における批評言語の差異について分析を加え、堅実な文学研究の礎とすることを考えている。また、今回入手したブレヒトに関する資料の読解も進めていきたい。